

# 平成 18 年度(1) NBRP-情報-運営委員会 議事概要

開催日時: 2006 年7月6日(木)14:00 - 16:45

開催場所: 国立情報学研究所 12階 1208室

参加委員: 山崎委員長 荒木委員 磯野委員 菊池委員 倉田委員 小林委員  
菅原委員 鈴木委員 中村委員 長村委員 深海委員 藤田委員  
水澤委員 吉川委員 渡邊委員

オブザーバー: 文部科学省研究振興局ライフサイエンス課 係長 中山 亮

事務局: 国立遺伝学研究所管理部 研究推進室

(欠席委員: 城石委員)

## 【冒頭】

山崎委員長より本委員会開催の経緯等説明があり、今回の委員会より鈴木委員、長村委員に参加いただくことの報告があった。

委員の自己紹介があり、文部科学省ライフサイエンス課中山係長から挨拶があった。

## 【議事】

### 報告事項

#### 1. バイオリソースの将来構想について

- 1-1: 資料2の将来構想案を叩き台として議論した。

資料2の情報センターに求められる要件10項目について以下のような意見があった。

- 10 項目の内容は常識的であり基本的に問題はない。
- ①「バイオリソース情報学」のような哲学的視点、②人材育成などの継続性に関する視点、③リソース機関との連携部分で、サポートより一歩踏み込んだ指導的な役割、などを加えるべきではないか。
- 前期はリソース機関との「連携」で一応の成果を見たが、後期はイニシアチブを取る(先導する)ことが期待されているのではないか。
- 「連携」という表現はリソースと情報の乖離をイメージさせる。「もの」と「情報」は切り離せないので「一体化」のような強い表現にすべきではないか。
- データベース構築においてリソース機関の自立を支援すべきではないか。
- 情報整備状況はリソースによってまちまちである。しかし、これまでのような情報セ

ンター対リソースセンターの 1 対1の連携だけではなく、全リソースの情報担当者を交えたワークショップなどを通して、お互いに他リソースの情報整備状況を知る機会を作り、意識を変えていく必要があるのではないか。情報センターとしての方向性などもそういう場を通して伝えていく必要があるのではないか。

-人材育成において、担当者のモチベーションを高めることや業務の評価、キャリアパスなどについて考えるべきではないか。(→これについては「バイオリソース整備戦略のための報告書(資料5) p20 にも、「バイオリソース整備に努める者のインセンティブを考慮し、独自のキャリアパスの構築が必要である。このような制度の確立なしには、人材の確保とバイオリソース事業の継続は困難となっていくであろう。」という記載がある。)

-全生物種のデータを集積することによって、新たな知の発見につながる可能性もあるのではないか、そうした「高次データ利用」の視点を加えてもよいのではないか。これについては賛否両論あった。

- 現時点では「高次データ利用」の実態が見えないので利用者側のニーズがあるかどうか疑問。オントロジーはリソースと直接的に関わり得るのかどうか。

- リソースとオントロジーは関わりがあると思う。実際に植物のグループではオントロジー構築とその利用が始まっている。

- 一見役に立たないように見えるデータでも、利用者の裁量によって無限の可能性があるとみえるのではないか。

-世界で進められているオントロジーの構築などは、こうした可能性に向けた現実的な試みである。

- フィールド化されたデータ(補足説明:割り当てられた項目に格納されるデータ。データベースは基本的に定義された項目とその値から成り立つ)だけではなく、ドキュメント情報も重要である。

## ●1-2:統合データベースとの連携について

(1) バイオリソース整備戦略のための報告書(資料5、p19)には「統合データベースプロジェクトと連携し、爆発的に増大するバイオリソース情報を他のさまざまな生命情報とともに提供できる体制を構築する必要がある。」と記載されている。このことからNBRP 情報も今後構築されるであろう「統合データベース」の動向を視野に入れる必要がある。

(2) データベース整備戦略作業部会の報告書「我が国におけるライフサイエンス分野のデータベース整備戦略のあり方について」を受けて、「ライフサイエンス分野の統合データベース整備事業」の受託実施機関の公募要領が発表された。作業部会の報告書については中山亮係長(ライフサイエンス課)から概要の説明があった。(報告書

におけるバイオリソースに関する記載は「p32、8. おわりに」に、「本報告書ではあまり触れなかったデータ(生物資源等の研究用材料に関するもの…<省略>が数多く存在する。これらに関しては、現在内閣府科学技術連携施策群(ポストゲノム)で進められているような各省庁連携の体制と連携をとって取組みを進めることが望ましい。…<省略>とあるため、今後は連携施策群の動向も視野に入れる必要がある。したがって、

(3) 連携施策群では農水のイネゲノムリソースと NBRP イネの連携について話し合いを開始する予定である。

(4) 一般的に統合化(統一化)は担当者のモチベーションを下げる。画一的なフォーマットの統一はよくない。より柔軟なデータベース構築が望まれる。

●1-3:「ナショナルバイオリソースプロジェクト評価報告書」の説明の後、第2期 NBRP に向けた将来構想案について資料2を叩き台として議論した。主な指摘点は、

(1) 記述が消極的過ぎる。魅力的な表現にすべきである。

(2) 優先度の低い「高次情報利用システムの構築」についても必要性の説明を十分に示して次期構想にいれてもよいのではないか。

(3) 優先度1に、各リソース機関の DB 自立支援を加える

(4) 情報(データベース)関連のワークショップの開催を含める。

(5) NBRP 以外のリソースを対象とするかどうかについて次のような意見があった。

- NBRP の信頼性を担保するためにも差別化は必須である。

- クリアリングハウスのような位置づけがよいのではないか。

- ジャンクデータベースという枠を作ってはどうか。

- いずれにしても慎重に考えるべきである。

## 2. その他

●資料6に基づき GAIN の成果と実績に関する報告があった。(吉川委員)

(1) GAIN の活動によって最終的に残るものは「もの」ではなく「情報」である。したがって GAIN にとって「情報=データベース」は極めて重要なものである。評価報告書(資料3,62P)にも、「大型類人猿バイオリソースの情報ネットワークの構築は、今後重要なものになる可能性があるため、これについての検討も期待する。」と記載されている。

(2) 資料7に基づき GBIF の成果報告があった。(菅原委員)

- GBIF では多数の分散しているデータベースを、Web サービスを使って仮想データベースとして提供している。すでに一億件のデータが利用可能になっている。多くのサイトで標本情報を GoogIMap にマップして提供している。
- 第 2 期計画書についてはこれから文書を作成して委員に見ていただく予定である。提出前にもう一度委員会を開催するか、メール会議でご意見を賜りたいのでよろしくをお願いしたい。また委員の方にはニュースレターに記事をご寄稿いただく予定なので、ご協力をお願いしたい。(委員長より)

以上